

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた実践
 ～「自ら進んで考え、学び合う生徒の育成」のための授業改善～

沼田町立沼田小学校
 学級数 10
 (校長 疋田 博和)
 沼田町立沼田中学校
 学級数 6
 (校長 米倉 卓司)

I はじめに

沼田町では、平成8年7月「沼田町一貫教育推進協議会」を設立し、沼田町教育振興会、沼田町PTA連合会等との連携を深める中で、教育行政と学校や認定こども園、保護者、地域が一体となった取組を推進してきた。

沼田小・中学校は、平成26年度から3年間「小中連携、一貫教育実践事業」実践指定校として、研究実践に努めた。また、平成28、29年度においては、「沼田町一貫・連携教育基本計画」に基づき、持続可能な組織・体制の整備、教育課程の編成等を行い「ふるさと沼田を愛し、自ら進んでたくましく、郷土の発展に寄与する子」の育成を目指してきた。平成30年度から「実践」と「継続」を確かなものにするため、小中一貫・連携教育推進校「沼田学園(通称)」として、その強みを生かした教育活動を展開している。

現在、児童生徒の学力向上に向けて、沼田町教育振興会を基軸に組織的な授業改善と「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指している。



【小中合同運動会の様子】



【小学校への乗り入れ授業の様子】

II 学力向上・授業改善に向けた取組の概要

1 児童生徒の実態

児童生徒は生活基盤である農村地帯の気風をもち、純朴、明朗である。学校行事や地域行事への参加を通して、一致結束して取り組む姿勢やリーダー性を発揮しようとする姿勢が育ってきており、これらの姿勢をさらに伸ばしていくことが求められる。学習に対する関心・意欲・態度は良好であり、全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査(NRT)等の結果から、学習内容は概ね身に付いている。

一方、家庭学習の時間が短く、学習の仕方が十分身に付いていない児童生徒もいる。したがって、生活リズムの中に、家庭学習や読書活動を確実に位置付け計画的に取り組む姿勢を育成している。

	沼田中学校	北海道	全道との差	全国	全国との差
	平均正答率	平均正答率		平均正答率	
国語	65%	72%	-7ポイント	72.8%	-7.8ポイント
数学	67%	58%	+9ポイント	59.8%	+7.2ポイント
英語	52%	54%	-2ポイント	56%	-4ポイント

【平成31年度全国学力・学習状況調査 沼田中学校の結果】

2 小中一貫・連携を基軸とした組織的な授業改善

(1) 沼田小中合同研修(沼田町教育振興会)

研修テーマ「自ら進んで考え、学びあう生徒の育成」～「沼田スタイル」を生かした授業づくり～

知・徳・体のバランスがとれた「生きる力」を確実に身に付けるため、児童生徒の主体的・対話的で深い学びに向けた授業の構築を重点に研究を推進している。

沼田小・中学校が学習過程において共通の課題をもち、児童生徒に合った「授業スタイル」の構築を目指し、昨年度は「課題とまとめの正対」「振り返り活動」の実践検証に取り組んだ。その成果(図2)を踏まえ、本年度は「対話的な学び」を重点課題とした。

一 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ・「沼田スタイル」についての共通理解と理論研究 ・「沼田スタイル」の場の設定とその工夫 ・「沼田スタイル」充実のための問題、課題、発問の工夫 ・授業における自己仮説の設定と実践、検証
二 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ・「沼田スタイル」の充実、授業構成と実践、検証 ・評価と指導の一体化についての理論研究 ・授業における自己仮説の設定と実践、検証
三 年 次	<ul style="list-style-type: none"> ・授業における自己仮説の設定と実践、検証 ・研究のまとめ ・新研究課題、研究の方向性の検討

(2)「沼田スタイル」の構築と実践

「沼田スタイル」とは、図1のように「課題とまとめの確実な実施」、展開における「対話的な学び」、「振り返り活動の充実」を沼田小・中学校共通して全教師で取り組む「授業スタイル」である。この授業スタイルの確実な実践を通して、主体的・対話的で深い学びの視点に立つ授業改善を目指すものである。

図1【沼田スタイル 授業基本形】



① 「主体的な学び」のために(平成30年度研修の成果より)



切実感のある課題設定により、学習意欲や見通しをもたせる。

「課題」は青、「まとめ」は赤のカードを表示する。

生徒自身で学習を進めるための明確な課題の提示と課題に正対したまとめ

単位時間における「振り返り」場面。時間は2分程度。ノート、ワークシート、振り返りカードへの記述する。⇒交流場面(発表)を設定し、他者の考えを聞き、さらに学習を深める。



文字言語により、学習を振り返り、成果を自らのものにする。

図2 「主体的な学び」をつくる

2つのポイント

① 課題設定・提示

課題解決に向けた学習活動と取り組んだ成果や結果(ゴール)について見通しをもたせる。

② 振り返り

既存の知識・技能等と関連付けながら、「何を学んだのか、何ができるようになったのか」等を生徒自身により明確にさせる。

留意点 タイムマネジメント

板書の工夫 等

⇒学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組み、学習内容を振り返ることにより、次につなげることができる。

② 「対話的な学び」に向けて(目指す「対話的な学び」の方向性 今年度の重点課題)

理想的な「対話的な学び」の場面 児童生徒の姿

- 児童生徒相互で課題解決ができる。
- 課題に沿って対話しようとする姿勢が見られる。
- 他を肯定し合える建設的な意見が出せる。
- 多様な意見により考えを深め課題解決に向かえる。
- 新たな課題を見つけ学ぶ意欲の高まりが見られる。



教師の関わり(役割)

- 教師が意図する活動を適切に児童生徒に伝えること
- 具体的なテーマ・視点、時間、課題との正対、人数調整
- 「話し合いのルール」などを作成し、「見える化」
- タイムマネジメント

【実践(例)資料 中1美術科 中3国語科】

指導過程	●学習活動 ・予想される発言など	◆教師のかかわり	□評価基準 ▲生徒への手立て
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ●前時までの振り返りをする。 ・絵筆のタッチ ・単純化、省略、強調といった表現 	<ul style="list-style-type: none"> ◆課題を提示する。 	
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> ●切断前の自然物を描く ●同じ自然物を描き、自然物を切断する。 ●切断後の自然物を描く ●切断した自然物を描く (1) スケッチワークシートに2Bの鉛筆を用いて大まかにスケッチする(約10分)。 (2) 文章…手触り、匂い など新しく発見したこと、気付いたことを文章でワークシートにまとめる(約5分) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲生徒に自然物を提示する。(付録1参照) 	<ul style="list-style-type: none"> ▲スケッチが終わらない生徒は、対象をカメラ撮影し、記録する

前時の想起

課題提示

生徒が行う対話的な学び 留意事項

- 「対話させること」が目的ではなく、「深い学び」のための手段として、意図的・計画的に単元の指導計画に位置付ける。
- 「伝える」だけの「一方通行」にせず、理由や根拠、思考のプロセスを伝える・聞く・ノートにメモなどすると良い学習に広げる。

思考を表現に置き換える

生徒が行う対話的な学び (ピクトグラムと具体的な活動)

多様な手段で発表する

生徒のまとめ活動例

毎時間自己評価カードへ振り返ることで、本時の学習内容の定着を図る。

【参考:独立行政法人教職員支援機構

アクティブ・ラーニング授業実践事例】

- 互いの考えを比較する
- 思考を表現に置き換える
- 先哲の考え方を手掛かりとする
- 協働して課題解決する
- 多様な情報を収集する
- 多様な手段で説明する
- 共に考えを創り上げる

対話的な活動を7つの「ピクトグラム」に示した。単元計画に沿って単位時間の学習過程に適切に取り入れ、生徒の対話的な活動を促す。

「ピクトグラム」を指導案に記載することで、授業者がより明確な意図をもって指導できる。

(2)PDCAサイクルを意識した授業改善

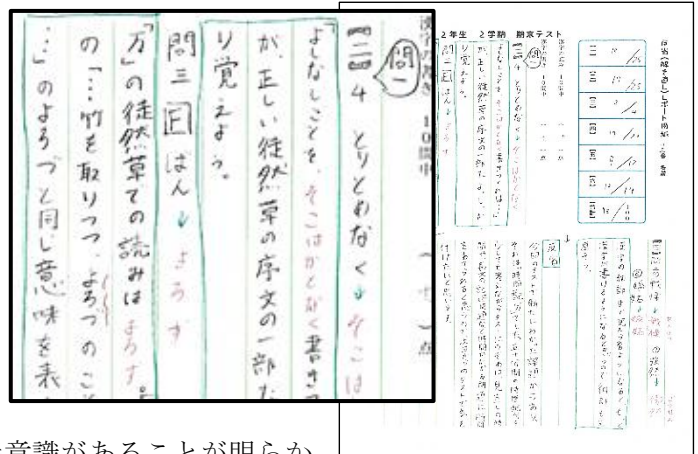
①「S-P表」を活用した取組

全国学力・学習状況調査の自校採点結果を「S-P表」に整理することにより、児童生徒の傾向を把握することができた。例えば、中学数学では、右表の赤枠で示す問題の解き直しや類似した問題に取り組ませた結果、正答率が16ポイント上昇した。こうした客観的なデータを活用し、学力の定着を目指す取組の一例である。

領域：数と式 問題2	(全国の正答率) 70.1%
連立二元一次方程式を解く	(本校) 80.0%⇒96.0%

① 「テスト反省レポート」の取組

定期テスト等においても、「解き直し」することにより、既習事項の復習、知識の定着を目指している。誤答は正解するまで解き直すことを基本としている。テスト問題を解き、「振り返り」をすることにより、生徒自らの課題把握やその後の学習の動機付けとなっている。継続した取組により、生徒が行う「振り返り」が単なる感想ではなく、正解を得るための思案となってきた。



② 授業改善、指導方法の工夫

NRTの分析から、「書く」ことに対する苦手意識があることが明らかとなった。こうしたことから10字作文、20字作文と段階的に取組を進め「書ける」という自信をもたせ、抵抗なく「書く」ことに繋げていくことを試みた。さらに「書く」ことを基本に、他人に向けて表現することを第3学年の課題とし国語科の授業において「1分間ペアスピーチ」を導入した。相手の反応を見ながら、話題の順序や伝え方の工夫、身振り手振りなどしながら、自らの思考について根拠をもってスピーチするなどの変容が見られた。



【1分間ペアスピーチの様子】

Ⅲ 成果と課題と今後の取組

- 明確な学習課題の提示による見通しをもった学習活動と単位時間の学びを振り返る活動の取組により、児童生徒の主体的な学びを生み出すことができた。
- 児童生徒の姿を「ピクトグラム」でイメージ化することにより、意図的、計画的に「対話的な学び」を学習過程に位置付け、児童生徒の深い学びを生み出すことができた。
- 課題を共有し、小・中学校において統一した学習過程を構築し実践することにより、教師の授業力向上の意識が高まった。また、学力向上に向けた小・中学校の円滑な接続の体制が整った。
- 今後も沼田スタイルを推進し、児童生徒の深い学びを生み出す学習課題や振り返り活動、対話的な学びの在り方について検証を行い、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を目指す必要がある。